■研究発表論文

アートインスタレーションを契機とするまなざしの変化から捉えた風景異化に関する研究

The Study for the Landscape Foreignization Based on the View Change Caused by the Art Installation

花村　周寛*　　加我　宏之**　　増田　昇**

Chikahiro HANAMURA　Hiroyuki KAGA　Noboru MASUDA

Abstract:This is the study for the "landscape foreignization" describes the perceptional and semasiological changes of humans "view" including body and mind, to their surrounding. This study is in the case of art installation in the open celling space of Osaka red cross hospital ward for inpatients.　According to the result of the questionnaire survey, there were 3 difference types of the consciousness, "conscious", "no conscious" and " never conscious" to the open celling space before installation. And regardless of the difference of these consciousness, there was the impression and view change after installation to some extent. And spatial assessment to the open celling space after installation is increase with the decrease the consciousness to the open celling space before. And these difference of the consciousness before caused the difference of the condition of landscape foreignization. The condition of the landscape foreignization among For the group of "conscious" to the open celling space, it is the limited landscape foreignization depends on the image of installation.For the group of "no conscious", it is the comprehensive landscape foreignization depends on the rediscovering the space in addition to the image of installation.For the group of "never concious", it is the space specialized landscape foreignization depends on the first discovery the space caused by the installation.

Keywords:*landscape foreignization,　installation,　view,　consciousness,　hospital*
キーワード：風景異化，インスタレーション，まなざし，意識，病院

1. はじめに

風景は物理的環境から構成されるだけではなく，その環境を認知する主体の心理状態や意味作用によっても構成される[1]。環境に対する視覚に加えて環境に対して抱く心理や意味まで含めた“まなざし”[2]の重要性はこれまでも風景研究の中で取り上げられているが，多くの風景計画では物理的環境の改変に帰着することを目指した研究か，あるいは風景の成立プロセスについての研究がほとんどであり，まなざしそのものを直接的に風景計画の対象とするような取り組みについては乏しい現状にある。しかし昨今の地球環境問題の中，環境の改変を極力抑えながらストックを活用することが都市づくりにも求められている状況で，風景への新たなまなざしを計画する可能性について模索することは大きな意義を伴うものと考えられる。

吉村ら[3]は「環境」と「風景」を区別した上で，「風景生成」という表現で，主体が積極的に環境を解釈することにより風景が生成されるとして，その成立プロセスについての一連の研究を進めている。その中で人間の知覚がある環境に対していったんそれに見慣れると，それに注意を払ったり意識してまなざしを向けなくなる「自動化」という言葉を引用しながら，それらの環境が何らかのきっかけで再びまなざしを向ける対象として「非自動化」されることで風景が生成されるとしている[4]。

この「自動化」と「非自動化」の議論は，主体の中で無意識化されたまなざしの変化を取り扱っている点で非常に示唆に富むが，「自動化」されることで主体の意識から失われたまなざしが，「非自動化」され再び取り戻されるというプロセス以外にも，主体の風景が新たに生成される状況があり得るのではないかと考えられる。ある環境へ主体が常に一定の意識を向けており，自動化されていない状態であっても，そこに何らかのきっかけによってまなざしに変化が生じ，これまでと異なった風景として生成される可能性があることは十分に考えられる。また同様に，主体がその環境を一度も意識した事がない状態であっても，何らかのきっかけでまなざしが向けられた結果，主体の内部で風景が新たに生成されることもあるのではないか。

このような観点から本論では，自動化されているかどうかに関わらず，ある環境に対して主体が心身ともに抱くまなざしに何らかの変化が起こり，接している環境が異なった風景として生成される現象を「風景異化」と呼び研究を進めるものとする。

風景研究の分野では取り扱われることが少ないが，主に言語学や記号学において提唱された異化という概念はシュクロフスキーが「日常的事物の組合せの中で生気を取り戻すこと」と定義している[5]ように，既にある環境へのまなざしを考える上で重要な概念であると考えられる。岡田らは芸術における異化手法の分析を行い，テクノスケープを対象にそれらの物理的環境への応用について研究を行っている[6]。しかしこれらの異化の前提として，ある環境が主体にどのように意識されており，また刺激の結果その主体のまなざしにどのような変化が生じたのかに着目した観点からの研究は深められていない現状にある。

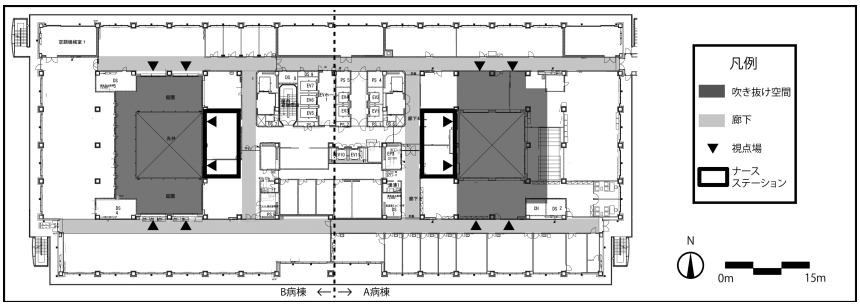
以上のことから，本論ではある一定の環境への意識が異なる主体に対して，芸術やイベントなどによって刺激を与え，その環境へのまなざしがどのように変化するのかを把握することで，風景異化について考察する事を目的とする。なお，本論では風景という用語を主体内部で立ち現れるものとして取り扱い，環境という用語を物理的な客体として用いる。

2. 研究の方法

(1) 病院におけるアートインスタレーション

本研究ではある一定の環境に対する主体の意識の違いを元に風景異化について考察するという目的から，異なるまなざしを持った主体が混在する環境を対象にしている。その中でも，その環境にずっと接している主体と，一定期間のみそこに滞在する主体が同居し，意識の違いや心理状態に幅があると考えられる施設として，病院を取り上げることとする。

*大阪府立大学大学21世紀科学研究機構　観光産業戦略研究所　**大阪府立大学大学院生命環境科学研究科



図－１　大阪赤十字病院内の吹き抜けの位置

筆者は芸術家として 2007 年から継続的に大阪市立大学医学部附属病院（以下，市大病院）や大阪赤十字病院（以下，赤十字病院）を中心とする大規模病院において芸術による風景異化の取り組みを企画，立案から実施に至るまで行っている。

本論では，筆者が大規模病院の吹き抜け空間（以下，吹き抜け）にて行うアートインスタレーション「霧はれて光きたる春」の鑑賞者を調査対象とし研究を進めるものとする。

インスタレーションとはある環境に創造性を持った何らかの操作を一時的に施し，その様相を変化させる環境芸術表現の一形態であり，近年では現代芸術表現手法の中心になりつつある[7]。インスタレーションによって環境に違う様相がもたらされたことで，鑑賞者の風景異化にどのような影響が及んだのかを考察することを本研究の目的としている。

「霧はれて光きたる春」（以下，インスタレーション）は 2010 年３月に市大病院にて実施した後，「おおさかカンヴァス事業」[8]の助成を受けて赤十字病院において再度行った. 実施日としては，2012 年１月，２月のそれぞれの平日に４日間ずつ，計８日間である。

インスタレーションが実施された場所は図－１に示すように，赤十字病院のＡ病棟，Ｂ病棟の入院病棟内の吹き抜けであり，いずれも底面が南北約 24m，東西約 15m で，南北に入院病棟の廊下が面し，東西はナースステーションやその他の施設が面している。全ての面に窓があり，吹き抜けを臨むことが出来るが，主な視点としては南北の廊下に面する窓とナースステーションの窓となっている。垂直方向の拡がりとしては，Ａ病棟は２階の外来病棟から 13 階まで，Ｂ病棟は４階から 13 階までであるが，いずれも入院病棟がある７階以上で鑑賞されることを目的にしている。ここでのインスタレーションの鑑賞者は 1,021 床を持つ赤十字病院の入院病棟における全ての人々である。

インスタレーションの内容としては，吹き抜けの底部に設置した４台の霧発生装置，屋上に設置した４台の雪発生装置及び４台のシャボン玉連続発生装置によって吹き抜け内に現象をおこし，底部に設置した 16 台の照明と院内の全館放送によって流した音楽によって演出を加えた（写真－１，写真－2）。

実施時刻は，全日において入院患者の午後の検査後から夕食までの時間帯である 16 時半からの 30 分間に行い，治療の邪魔にならないように配慮した。また入院患者の体力や医師・看護師の鑑賞時間などを考慮して，10 分間に雪と霧とシャボン玉の全ての現象が鑑賞出来るような演出とし，それを時間内に３回行った。

(2) 調査方法

調査方法としては大阪赤十字病院にて実施した８日間のインスタレーションの鑑賞者全てを対象にアンケート調査を行った。アンケートの配布は「おおさかカンヴァス事業」のスタッフがインスタレーションの実施中及び終了直後に鑑賞者に質問票を直接配布し，その場で書き込み回収する方法と，持ち帰って記載してもらい後ほど各階のナースステーションに設置された回収箱で回収する方法を取った。

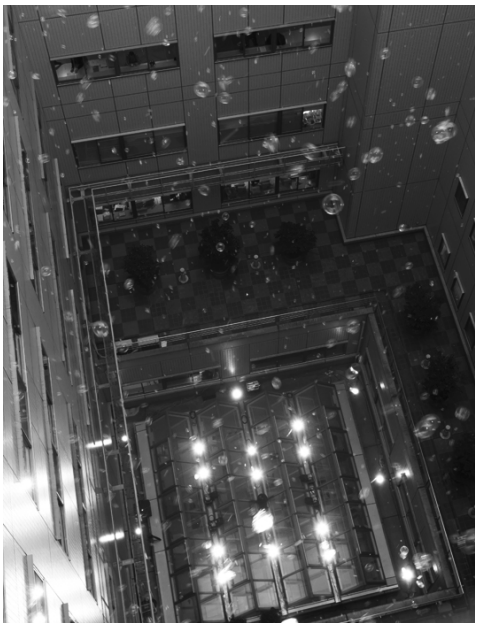
調査項目は「鑑賞者属性について」，「吹き抜けについて」の二項目である．鑑賞者属性については，「院内での立場」，「年齢」，「性別」についての回答を求めた。

吹き抜けについては，インスタレーションの鑑賞前における吹き抜けへの「意識の違い」や鑑賞後の「印象変化」と「情緒的評価」について回答を求めた。

本論ではまなざしの変化による風景異化の成立に，元々の環境への意識の違いが影響しているのではないかという視点にたっているので，吹き抜けへの意識別に「鑑賞者属性」，「印象変化」及び「情緒的評価」のそれぞれを解析することとした。

「意識の違い」については「意識していた」，「意識していなかった」，「知らなかった」の 3 つからの択一選択，「印象変化」についてはインスタレーション観賞後に印象が「変わった」，「変わらない」，「どちらとも言えない」の３つから択一選択する質問を行った。また吹き抜けについての「情緒的評価」は「活気がある／さびしい」から「美しい／みにくい」までの 10 項目を設定し，それぞれに〈大変やや普通やや大変〉の５段階での選択記入を求めた。

「情緒的評価」については，各評価項目の５段階尺度に 22 の評価点を与え，意識別に平均評価点と標準偏差を算出した．次いでこれを基礎データとして因子分析（バリマックス法）を行い，その因子負荷量を用いて意識別の環境評価の構造を把握した。



写真―１　インスタレーションの状況（シャボン玉）

写真－２　インスタレーションの状況（霧）

3. 結果

(1) 意識別の鑑賞者属性

アンケートの回収結果は１月，２月あわせて 189 名で，その内の有効回答数は 172 名であった。吹き抜けへの意識別に見た鑑賞者属性を表－1 に示す。

表－１　鑑賞者の属性

		院内での対場					年齢							性別			合計
		入院患者	ご家族・知人	医師・看護師	その他	無回答	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	無回答	男性	女性	無回答	
意識していた	人数(人)	15	9	12	1	1	5	5	4	6	12	5	1	14	16	8	38
	割合(%)	21.1	20.0	44.4	6.7	7.1	21.7	20.8	23.5	26.1	28.6	17.2	7.1	30.4	20.0	17.4	22.1
意識していなかった	人数(人)	46	21	14	4	5	11	13	8	10	24	16	8	26	45	19	90
	割合(%)	64.8	46.7	51.9	26.7	35.7	47.8	54.2	47.1	43.5	57.1	55.2	57.1	56.5	56.3	41.3	52.3
知らなかった	人数(人)	10	15	1	10	8	7	6	5	7	6	8	5	6	19	19	44
	割合(%)	14.1	33.3	3.7	66.7	57.1	30.4	25.0	29.4	30.4	14.3	27.6	35.7	13.0	23.8	41.3	25.6
合計	人数(人)	71	45	27	15	14	23	24	17	23	42	29	14	46	80	46	172
	割合(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

全体の鑑賞者では吹き抜けを「意識していた」人が 22.1%，「意識していなかった」人が 52.3%，「知らなかった」人が 25.6%となっており，半数以上の人々が吹き抜けを意識していなかったままインスタレーションを鑑賞していたという結果となった。

またそれらの属性別に違いを見ると，「院内での立場」に関して違いが見られたが，「年齢」や「性別」では大きな違いが見られなかった。

院内の立場ごとに吹き抜けへの意識の傾け方を見ると，入院患者 71 人中 21.1%が吹き抜けを「意識していた」，64.8%が「意識していなかった」，14.1%が「知らなかった」という結果になった。またご家族・知人では 45 人中 20.0%が「意識していた」，46.7%が「意識していなかった」，33.3%が「知らなかった」という結果になった。また医師・看護師では 27 人中 44.4%が「意識していた」，51.9%が「意識していなかった」，3.7%が「知らなかった」という結果となった。

以上の解析結果から，入院患者については，6 割以上が吹き抜けを「意識していない」状態で風景の自動化が発生しているものと考えられるが，「意識していた」人も一定数見られる．これは入院して間もない人でまだ自動化されていない人が居るからと考えられる。またご家族・知人も半数近くが吹き抜けを意識しておらず，3 割以上が吹き抜けを「知らなかった」と選択しているのは，入院患者や医師・看護師と比較して，滞在時間も短く，訪れる頻度も少ないため，そもそも吹き抜けにまなざしを向けていない人が居るからであると考えられる。医師・看護師については「知らなかった」人はほぼいない状態であり，吹き抜けを意識していなかった人が半数以上いた。一方 4 割以上の人が意識していたと答えており，吹き抜けが自動化せずに意識されている．これは医療従事者という職業上，周囲の環境に対しても気を配らせているためであると考えられる。

(2) 意識別に見た吹き抜けの印象変化について

図－2 に示すように，インスタレーション鑑賞後の吹き抜けに対する印象変化を意識別に見てみる。インスタレーションの鑑賞前に吹き抜けを「意識していた」人では，38 人中印象が「変わった」人が 37.8%，印象が「変わらない」人が 37.8%見られた。吹き抜けを「意識していなかった」人では，90 人中印象が「変わった」人が 38.9%，「変わらない」人は 31.1%となり，両者の間に大きな差は見られなかった。一方，吹き抜けを「知らなかった」人では，44 人中印象が「変わった」人は 63.6%に対して，「変わらない」人はわずかに 6.8%となっている。

これらから考察すると，意識の違いに関わらずある一定割合の人が印象変化を感じていることから，インスタレーションが吹き抜けの印象変化に作用しているということが伺える。特に顕著に印象変化が見られた吹き抜けを「知らなかった」人については，6 割を超える人々が鑑賞後に吹き抜けへの印象変化を感じている。これはインスタレーションが展開されることによってこれまで一度もまなざしを向けたことの無い環境へまなざしが新たに向けられ，吹き抜けという対象そのものが発見されたことによるのではないかと考えられる。

(3) 意識別に見た吹き抜けの情緒的評価

（Ⅰ）環境評価について

吹き抜けに対する意識別の情緒的評価については，図－3 に示すように意識の違いによらず全ての項目における平均評価点がプラスの値を示している。

意識別に平均評価点の分布を見てみると，吹き抜けを「意識していた」人では「開放感」(0.94) が最も高く，次いで「美しい」(0.70)，「明るい」(0.69)と続き，最も低い項目では「個性的」(0.24) となっている。また「意識していなかった」人も同様に「開放感」(0.94) を最も高く評価しており，次いで「美しい」(0.91)，「爽やか」(0.67)，「明るい」(0.67) と続いており，最も低く評価されているのが「活気」(0.30) となっている。「知らなかった」人についても「開放感」(1.24) が最も高く評価され，次いで「明るい」(1.15)，「美しい」(1.00)，「暖かい」(0.90) となっており，最も低く評価されているのが「活気」(0.28)となっている。

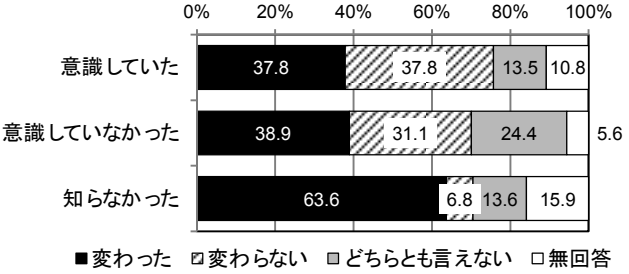
以上より，総じてほとんどの情緒的語句において，吹き抜けを「知らなかった」人の評価が最も高く，「意識していなかった」人も「意識していた」人と比べて平均評価点が若干高くなっていることから，環境への意識が元々弱いほどインスタレーションの体験がその後の環境の印象へ及ぼす影響が大きいのではないかと考えられる。

また意識の違いによらず多くの人々が吹き抜けを開放的な風景として眺めていることが伺えるが，吹き抜けを「知らなかった」人は他の意識の人々と比べて環境をより開放的で明るく暖かいと感じていることから，光を取り込む吹き抜けの存在そのものへまなざしが向けられたと考えられる。また吹き抜けの美しさや爽やかさについては意識によってばらつきが見られ，「意識している」人に比べて「意識していなかった」人，「知らなかった」人ごとに順に高くなっていることから，インスタレーションでの美しく爽やかな体験を通して環境そのものを発見しているため，環境への評価も一体となって評価されたのではないかと考えられる。

（Ⅱ）環境評価構造について

評価結果の個人データを意識別に用いて因子分析を適用した結果の因子負荷量を表－2 に示す。なおここでは，各因子に対応する固有値が 1.000 以上となる第Ⅱ因子までを取り上げて考察を進めるものとした。

「意識していた」人の解析結果を見ると，評価の主軸となる第１因子では「明るい」(0.882)，「活気」(0.842)，「親しみ」(0.804) の３項目，第Ⅱ因子は「美しい」(0.872)，「潤い」(0.814)，「さわやかな」(0.761) の３項目で，それぞれ 0.700 以上の値を取ることから，第Ⅰ因子を『賑わい性』，第Ⅱ因子を『審美性』を示す



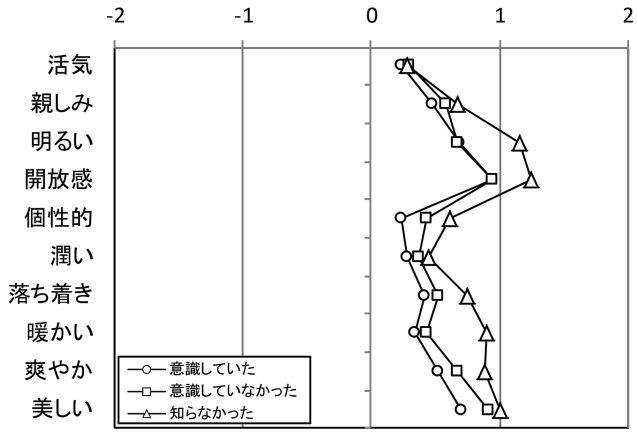
図－２　意識別の印象変化

ものと判断した。

「意識していなかった」人を見ると，固有値が 1.000 以上となるのは第１因子のみで，0.700 以上の値を取る項目が，「美しい」（0.801），「暖かい」（0.799），「明るい」（0.784），「さわやかな」（0.775），「開放感」（0.741），「落ち着き」（0.730），「親しみ」（0.727）と７項目にも上り，第１因子は『総合性』を示していると判断した。

「知らなかった」人を見ると，評価の主軸となる第Ⅰ因子では「潤い」（0.927），「暖かい」（0.847），「親しみ」（0.804），「個性的」（0.736）の４項目，第Ⅱ因子は「開放感」（0.973），「明るい」（0.735）の２項目で，それぞれ 0.700 以上の値を取る事から，第Ⅰ因子を『特色性』，第Ⅱ因子を『開放性』を示すものと判断した。

以上の結果より，インスタレーション鑑賞前のまなざしの違いによって鑑賞後に評価するポイントが異なる事から，同じ環境に対してそれぞれが見ている風景が異なっているのではないかと考えられる。まなざしをずっと向けている人（意識していた人）は，普段は変化がない吹き抜けに対して，インスタレーションが行われることによって賑やさや美しさがより際立った風景として感じられたのではないかと考えられる。またインスタレーションをきっかけに再びまなざしを向けなおした人（意識していなかった人）は，インスタレーションがもたらすイメージに加えて，以前の環境の様々な特徴もあわせて発見されたため風景に総合的な評価を与えたのではないかと考えられる。まなざしを初めて向けた人（知らなかった人）については，インスタレーションによって吹き抜けそのものの存在に初めて気がついたために，特色のあるものとして捉えられ，元々吹き抜けにまなざしを向けていた人よりも，より光に満ちた吹き抜けの特徴的な構造が風景として感じられたことが分かる。



	意識していた		意識していなかった		知らなかった	
	平均評価点	標準偏差	平均評価点	標準偏差	平均評価点	標準偏差
活気	0.24	0.82	0.30	0.74	0.28	0.87
親しみ	0.48	0.82	0.59	0.80	0.67	1.01
明るい	0.69	0.91	0.67	0.92	1.15	0.89
開放感	0.94	0.85	0.94	0.92	1.24	0.78
個性的	0.24	0.89	0.43	0.82	0.61	1.10
潤い	0.28	0.87	0.37	0.77	0.44	0.83
落ち着き	0.41	0.70	0.52	0.83	0.75	0.79
暖かい	0.34	0.81	0.43	0.87	0.90	1.03
爽やか	0.52	0.70	0.67	0.89	0.88	0.86
美しい	0.70	0.87	0.91	0.87	1.00	0.84

図－３　吹き抜け空間の印象に関する評価結果

表―２　吹き抜け空間の印象に関する因子分析結果

因子負荷量	意識していた		意識していなかった	知らなかった	
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅰ因子	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子
活気がある	0.842	0.263	0.664	0.628	0.204
親しみやすい	0.804	0.349	0.727	0.804	0.145
明るい	0.882	0.289	0.784	0.386	0.735
開放感のある	0.633	0.525	0.741	0.054	0.973
個性的な	0.499	0.608	0.565	0.736	0.180
うるおいのある	0.490	0.814	0.618	0.927	0.222
落ち着き感のある	0.404	0.578	0.730	0.203	0.538
暖かい	0.531	0.597	0.799	0.847	0.257
さわやかな	0.364	0.761	0.775	0.634	0.477
美しい	0.123	0.872	0.801	0.628	0.472
固有値	6.601	1.102	5.712	5.634	1.525
累積寄与率	66.01	77.02	57.12	56.34	71.58

4. 考察

以上の結果から総合的に考察すると，ある環境においてインスタレーションなどの刺激を与えることで，鑑賞者の中でこれまでとは異なった風景が生成される「風景異化」が一定割合で成立することが分かった。

医師・看護師がより吹き抜けを意識しており，ご家族・知人が知らなかった割合が高かったことに見られるように，置かれている立場や目的の持ち方によって，元々環境へ向けるまなざしが異なると考えられるが，そのまなざしの持ち方の違いによって風景異化の強度や様相が異なることがわかる。ある一定の環境を意識して常にまなざしを向けている人（意識していた人）や，意識はしていないが一度でもまなざしを向けた事がある人（意識していなかった人）よりも，初めてまなざしを向けた人（知らなかった人）の方がより異化の強度が高くなるのは，インスタレーションなどの刺激を通して環境の存在そのものにも，初めてまなざしが向けられているためであることがわかった。

また，常に環境に対してまなざしを向けている人にとっては，インスタレーションなどの刺激が普段の環境に対して作用し，賑わい性や審美性が高まるのみという結果に見られるように限定的な風景異化であることに対して，自動化されまなざしを一度失った人（意識していなかった人）にとってはインスタレーションの刺激に加えて環境の様々な特徴も一体となって再発見されることから総合的な風景異化が起こったと言える。また初めてまなざしを向ける人（知らなかった人）は，インスタレーションによって環境が初めて発見されるため，環境の特徴的な構造が特色として前面に浮かび上がる風景異化が起こると言える。

補注及び引用文献

1）ケビン・リンチの「都市のイメージ」などの都市計画分野，イーフー・トゥアンの「空間の経験」やオギュスタン・ベルクの「日本の風景，西欧の景観」などの地理学分野，また造園学の風景計画などでこれまで研究が行われている。

2）主体が対象を捉える視線，風景を生成させる視線をここでは“まなざし”と呼ぶ．このまなざしとは知覚的な視線に加えて，心理的な印象や意味まで含めた視線を指し，文化として構造化された視線も含めたある特定の見方を指している。

3）馬木知子・吉村晶子(2000)：廻遊式庭園にみる風景生成に関する研究：ランドスケープ研究 63(5),573-576.

4）吉村晶子(2004)：原風景の生成に関する研究：ランドスケープ研究 67(5),731-736.

5）岡田昌彰・アンドレアヤニッキー・中村良夫（1997）：異化概念によるテクノスケープの解釈に関する研究：ランドスケープ研究 60(5),601-606.

6）P.スタイナー（1986）：ロシア・フォルマリズム：勁草書房：東京 319pp.

7）インスタレーション（Installation art）とは，1970 年代以降一般化した，絵画・彫刻・映像・写真などと並ぶ現代美術における表現手法の一つである．ある特定の空間にオブジェや装置を置いて，作家の意向に沿って空間を構成し変化・異化させ，場所や空間全体を作品として体験させる芸術としてジャンル化されている。

8）「おおさかカンヴァス事業」は大阪府下の公共空間を芸術によって活性化させる目的で 2010 年度より行われている大阪府の芸術助成事業である．2011 年度は 43 組の芸術家が助成を受けている。